

緊迫する

世界

川上高司

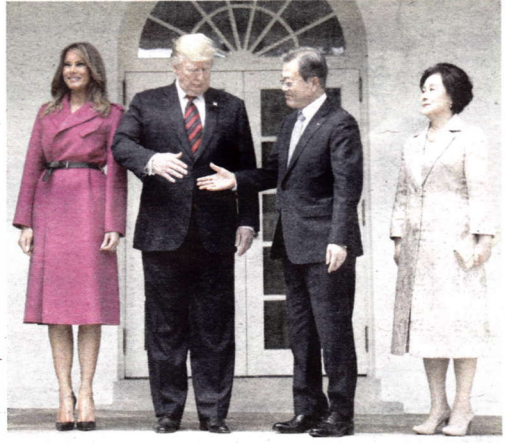


★ ★ 1

かわかみ・たかし 1955年、熊本県生まれ。拓殖大学海外事情研究所所長。大阪大学博士（国際公共政策）。フレッツチャースクール外交政策研究所研究員。世界平和研究所研究員。防衛庁防衛研究所主任研究官、北陸大学法学部教授などを経て現職。著書に『新しい戦争』とは何か（ミネルヴァ書房）、『トランプ後の世界秩序』（東洋経済新報社）など。

ホワイトハウスで11日に行われた米韓首脳会談では、実質的な会談時間はわずか2分だった。ドナルド・トランプ大統領から、文在寅（ムン・ジェイン）大統領が軽くあしらわれる様子が惨めであった。米国は、韓国を見捨てるのではないか。

トランプ氏は3月末、ロシアゲート問題で、特別検察による追及から逃れた。これで朝鮮半島をめぐるフェーズも変わった。トランプ氏は、フリーハンドで北朝鮮と対峙（たいじ）できるようになった。ベトナムの首都ハノイで2月、米朝首脳会談が行われたときには、トランプ氏は窮地に立たされ



ていた。昨年11月の中間選挙で敗北したうえ、ロシアゲート問題で米議会から弾劾裁判を受ける可能性すらあったのだ。

そうならば、大統領再選の芽がなくなってしまう。何としても、その矛先を外に回す必要がある。ハノイ会談で一発逆転という思惑もあったに違いない。そこに目を付けたのが韓国だった。文氏は、北朝鮮と米国との間に立ち、2回目の米朝首脳会談をセツトし

トランプ氏（左から2人目）と、文氏（同3人目）は、夫人同伴で異例の首脳会談を行った。11日（AP）

たのである。しかし、ハノイ会談は決裂に終わった。北朝鮮に「完全非核化」の意思はなかった。トランプ氏は外交的得点を挙げられず、国内から非難された。次に米朝首脳会談をやって、何ら成果が挙げられない場合、大統領選挙の足かせとなる。それなら開催しない。文氏がどのような誘い水をかけようと、トランプ氏には3回目の米朝首脳会談を行うメリットはない。

首脳会談「実質2分」米は韓国の裏切り許さず

裁違反だ。さらに昨年、韓国は300以上に上る石油製品を北朝鮮に提供していた。トランプ氏は11日の米韓首脳会談直前、自分の代わりに、マイク・ペンス副大統領と、マイク・ポンペオ国務長官に「いい加減にして」と、文氏を恫喝（どうかつ）させた。

米軍のインド太平洋司令部は3月以降、沿岸警備隊の大型警備艦「バートルフ」を、東シナ海での「瀬取り」取り締まりに投入した。米国が本格的に「韓国の裏切り」を監視し始めたのだ。毎年春に実施していた2つの米韓合同演習の打ち切りも発表された。米国が、韓国を見放しつつあるのは明らかである。ここで、北朝鮮が北西部・東倉里（トンチャンリ）のミサイル発射場の復旧を完了させ、弾道ミサイルを試射するようなことがあれば、米国は韓国を考慮せずに、北朝鮮への先制攻撃を行う可能性が出てきた。もはや、「韓国の泣き」は通用しない。

トランプに見限られた文在寅